

ピョートル・サヴィツキーの思想と今日的意義

—現代ロシアのユーラシア主義復権—

黒岩幸子*

要 旨 革命後にヨーロッパへ亡命したロシア知識人の間で、1920-30年代に起きた思想潮流であるユーラシア主義は、共産主義を否定し、ロシア正教に基づくユーラシア国家の建設を提唱したために、ソ連時代は黙殺されてきた。しかし、1990年代初頭からロシアの言論界で復権を果たし、ロシアの新たな発展の道を示唆する思想として注目されている。この潮流の中核的存在であったサヴィツキーの思想を、歴史、文化、地政学などの視点から明確にし、復権の背景を踏まえて、その今日的意義を考察した。

キーワード ピョートル・サヴィツキー、ユーラシア主義、ロシア=ユーラシア、ネオ・ユーラシア主義。

はじめに

1990年初頭からロシア知識人の間で、ユーラシア主義(евразийство)が注目され、論じられるようになった。欧米諸国との協調を重視する北大西洋主義の対立概念として、また、旧ソ連再統合の理念として用いられるようにもなったユーラシア主義は、本来は、ロシア革命後にヨーロッパへ亡命したロシア知識人の間で、1920年から30年代にかけて起こった思想潮流であり、政治運動である。歴史、文明論、地政学的見地からロシアを見直し、ユーラシア国家としてのロシアの発展を提唱したユーラシア主義者たちは、ロシアを破滅に導く思想として共産主義を否定したため、ソ連時代には自国では黙殺され¹⁾、著作の出版も許されなかった。

ユーラシア主義がはじめてソ連・ロシアで紹介されるようになったのは、ペレストロイカで情報公開が進んだ1980年代末のことである。ユーラシア主義者の論文が断片的に学術誌や雑誌に掲載されるようになり、その後、まとまった論集や著作集の出版も始まった。研究者だけでなく、ロシアの政界やマスコミでも論じられるようになるが、ユーラシア主義の活動には多数の知識人が関与し、分裂も経験しているため、どこに焦点を当てるかにより評価や分析は時として相矛盾する結論を生んでいる。また、同

時に進んだ現代ロシアの文脈でのユーラシア主義の読み直しは、本来の思想や理念とは必ずしも一致しないネオ・ユーラシア主義とも呼ぶべき潮流を引き起こし、これがユーラシア主義と混同して理解されることもある。

本稿は、1920-30年代のユーラシア主義運動の中核的存在であったピョートル・サヴィツキー(Петр Николаевич Савицкий, 1895-1968)の思想を通して本来のユーラシア主義の姿を明らかにし、これを踏まえて現代ロシアにおける復権の意味を考察するものである。当時のユーラシア主義者たちが発表した7冊の論集²⁾の監修者を務め、自らも活発な著作、啓蒙活動を行って運動の指導的立場にあったサヴィツキー抜きには、ユーラシア主義は成立し得なかったであろう。また、運動の分裂後も基本的にはユーラシア主義初期の理念を保ち続けたこと、復権後に特に注目されている地政学をロシアではじめて本格的に展開したことで、サヴィツキーはユーラシア主義の代表的存在といえる。

ユーラシア主義は、起源をたどればダニレフスキー(Николай Яковлевич Данилевский, 1822-85)やレオンチェフ(Константин Николаевич Леонтьев, 1831-91)の後期スラヴ主義に、継承としてはソビエト政権下でも途絶えることのなかった

*岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子

ナショナル・ボリシェヴィズムに繋がっているが、前後の系譜の研究は今後の課題とすることとし、ここではサヴィツキーとその復権に焦点を絞って論ずることとした。本稿ではまず、サヴィツキーの生涯とユーラシア主義運動の経緯を概観し(1)、サヴィツキーがロシア革命をどのように理解したか(2)、かれが提唱したユーラシアの歴史的、文化的概念(3)、地政学から見たユーラシア(4)を明らかにし、最後に、現代ロシアにおける復権の意味を考察する(5)。

1. サヴィツキーとユーラシア主義

(1) 亡命と受難のユーラシア主義者

1895年にウクライナのチェルニゴフ郡で貴族の家に生まれたピョートル・ニコラエヴィチ・サヴィツキーは、ベトログラード工業大学で経済学を専攻した。若くして多言語に優れ、歴史、哲学、美術、国際関係など幅広い教養を身につけたかれは、1916-17年にはノルウェーのロシア大使館に勤務した。

カデット(立憲民主党)のイデオログであったピョートル・ストルーヴェ(Петр Бернгардович Струве, 1870-1940)やウラジーミル・ヴェルナツキー(Владимир Иванович Вернадский, 1863-1945)に師事し、政治的には自由主義の影響を受けていたサヴィツキーは、当然ロシア革命には反対の立場をとった。内戦では白軍に身を投じ、ピョートル・ヴァンゲリ将軍(Петр Николаевич Врангель, 1878-1928)の内閣で外相を務めたストルーヴェの第一補佐官になった。

白軍が敗北すると1920年にブルガリアの首都ソフィアへ亡命し、ストルーヴェが編集する月刊誌『ロシア思想』の編集に加わった。ソフィアでは、後にユーラシア主義の中核をなす人々と交友を結び、論集を出版して本格的な運動を開始する。

翌1921年にプラハに移ると、精力的な執筆活動のほかに多数のセミナーや会議を主催し、ユーラシア主義運動の指導的地位を占めるようになる。ソ連の収容所で過ごした約10年間を除き、最後まで暮らしたプラハでは、その多彩な知識により教育の分野でも活躍した。ロシア法学校経済・統計講座、農業協同組合ロシア研究所経済地理・農業地理講座、プラ

ハ・ロシア人民大学社会科学などで講師を務めたほか、1930年代後半にユーラシア主義運動が衰退した頃は、プラハ・ドイツ大学でロシア語・ウクライナ語・ロシア学を教え、1940年からは、ロシア中学校の校長を務めていた。

サヴィツキーは、第二次世界大戦期にはナチスの侵攻に反対してロシアの救国運動に参加したにもかかわらず、1945年にプラハに進駐したソ連軍により拘束された。送還されたモスクワで反ソ活動の罪による労働収容所10年の刑を宣告され、ボルガ地域のモルドヴィアで8年、モスクワ郊外で2年を服役し、名誉回復のうえ釈放されたのはスターリン批判の行われた1956年である。その後プラハの家族のもとへ行くが、教職に復帰することは許されず、翻訳で生計を立てた。

1961年に、東方を意味するヴォストコフ(Восток)という名前で収容所生活を書いた文章を発表したため、チェコ当局により再び投獄されるが、パートランド・ラッセル(Bertrand Russell, 1872-1970)らの支援により釈放された。1968年に73歳でプラハで死亡した時は、生活に困窮し、社会からもまったく忘れ去られた存在であった。その生涯の細部については、まだ不明な点が多い。

(2) ユーラシア主義の潮流

ユーラシア主義は、1920年に言語学者のニコライ・トルベツコイ(Николай Сергеевич Трубецкой, 1890-1938)が亡命先のソフィアで発表した論文「ヨーロッパと人類」に端を発する。西欧文化の普遍性・優越性という概念を痛烈に批判し、西欧化による価値基準の崩壊と独自の文化の喪失に警鐘を鳴らしたこの論文は、サヴィツキーをはじめとする若い亡命ロシア人の注目を集めた。

ロマン・ゲルマン民族が生み出した西欧文明は、存在する幾多の文化の一つに過ぎないが、人類普遍の文明であるかのように広められている。「ロマン・ゲルマン人は、自分自身および自分と同一のものすべてを高級とみなし、自分と異なるものすべてを低級とみなす」。西欧との差異を「未開」「野蛮」として、西欧化を「進歩」として捉える誤った価値基準は、

西欧化した非西欧圏の知識階層によって自国に持ち込まれ、本来の文化を蝕み、その国を混乱させる。「結果は、あまりに過酷で恐ろしく、ヨーロッパ化は善でなく悪と見なさざるをえない」。非西欧のすべての民族は結束して西欧文化に立ち向かうべきとするトルベツコイの主張は、「ロマン・ゲルマン人と世界の他の民族すべて」³⁾、つまり「ヨーロッパと人類」の対決の構図に集約される。

翌1921年初頭にサヴィツキーが、トルベツコイへの共感と批判を込めた「ヨーロッパとユーラシア(N.S.トルベツコイ公の小冊子『ヨーロッパと人類』について)」を『ロシア思想』に発表して、ユーラシア主義は形成される。サヴィツキーの論文にはすでに、ロシア革命およびボリシェビズムの評価、西欧化の問題、ロシア=ユーラシアの地理・地政・文化的意味など、その後の運動の主要なテーマが出そろっている。「われわれは『ユーラシア』という名に、『ロシア』と呼ぶこともできる世界の凝縮された文化=歴史的な性格を込めている」として、「ヨーロッパでもなく、アジアでもない」⁴⁾ユーラシアというユーラシア主義の中心的テーゼが打ち出された。

同年ソフィアで、トルベツコイとサヴィツキーは、ピョートル・スヴチンスキー(Петр Петрович Сувчинский, 1892-1985, 音楽・文学)、ゲオルギー・フロロフスキー(Георгий Васильевич Флоровский, 1893-1979, 哲学・神学・文化史)とともに、論集『東方への脱出 予感と成就』を出版して、亡命ロシア人の間に大きな反響を呼んだ。プラハに移ったサヴィツキーは、翌1922年に2作目の論集『行路にて ユーラシア主義者の主張』を出し、その潮流は確立して行く。1931年に、最後の論集となった7冊目の『30年代 ユーラシア主義者の主張』が出るまで、数多くの亡命ロシア知識人がサヴィツキーを中心に次々と論文を発表した。

ユーラシア主義運動には、レフ・カルサヴィン(Лев Платонович Карсавин, 1882-1952, 歴史・哲学)、ピョートル・ビツィツリ(Петр Михайлович Бицилли, 1883-1953, 人文・歴史)、ゲオルギー・ヴェルナツキー(Георгий Владимирович Вернадский, 1887-1973, 歴史)、ウラジー

ミル・イリイン(Владимир Николаевич Ильин, 1890-1974, 神学・哲学)など、時期や期間は様々ながら、多彩な知識人がかかわっていく。個々のユーラシア主義者の考えは必ずしも統一されたものではなかったが、共産主義の否定、ロシア正教の重視、ユーラシアとしてのロシア史・文化の見直しなどの共通の理念によって結ばれ、運動はベルリンやパリにも広がり、ソ連内でも注目された。1926年には、ユーラシア主義の綱領ともいべき『ユーラシア主義 体系的叙述の試み』が発表され、イデオロギーの基礎に正教をおき、ユーラシア文化を担う新たなロシアの発展の道を提唱した。

(3) 分裂と消滅

ユーラシア主義者のほとんどは、ロシア革命および内戦期に亡命した知識人であり、共産主義政権の否定においては立場を同じくしていた。しかし、1922年に成立したソ連邦は、1924、25年に西欧諸国や日本により新国家として承認され、ボリシェヴィキ政権の確立は明白になった。ソビエト政権が次第に強固になるにつれ、ユーラシア主義運動内では、ソ連容認派とそれに反対する右派の対立が顕著になる。1920年代末には、親ボリシェヴィキの傾向を強める左派を批判して、主要人物が相次いで運動から離脱した。

「ユーラシア主義の運命は、失敗の精神史である。…質問は正しいが、答えが誤っている。課題は正しいが、解決が誤っている」⁵⁾。1928年のフロロフスキーの決別宣言となった論文「ユーラシア主義の誘惑」は、ユーラシア主義の個々のテーゼを尽く批判した厳しい内容だった。翌1929年には、「所与の状況において、わたしは今般のユーラシア主義の進化に責任を負うことはできないし、負いたくもない」⁶⁾と述べて、運動の原点であったトルベツコイも去った。

左傾化を批判しながらもサヴィツキーは運動を続けたが、1930年代に入ると内部分裂だけでなく、OGPU(合同国家保安部、KGBの前身)の介入も激しくなった。ソ連の諜報員がユーラシア主義内部の親ソ派を利用するようになり、パリ支部に至ってはソ

連の宣伝機関の様相を呈するようになった。ソ連にも「赤いユーラシア主義者」がいると言われ、サヴィツキーも一時ソ連に入国した経緯がある⁷⁾。優れた知識人の多くが離脱したため、運動は1930年代後半には自然消滅に至る。こうして、わずか十数年で盛衰を見たユーラシア主義は歴史の中に埋もれ、その後の復権は半世紀を経てのことである。

運動消滅後のユーラシア主義者たちの中には、フロロフスキーやヴェルナツキーのように欧米の大学で研究活動を続けた者もいるが、ソ連の現状を見極めきれずに理想化して捉え、帰国の道を選んだ者も多かった。スターリンの肅正があらゆる社会層を襲った1930年代に帰国したカルサヴィンやドミトリー・スヴァトポルク・ミルスキー(Дмитрий Петрович Святополк-Мирский, 1890-1939, 文学史・文学批評)など、その多くが強制収容所で落命した。西欧にとどまったトルベツコイはソ連内の肉親を失い⁸⁾、サヴィツキーの後半生もまた過酷であった。なお、収容所内でサヴィツキーに師事し、その後も親交を結んでいた歴史・民族学者のレフ・グミリオフ(Лев Николаевич Гумилев, 1912-92)は「最後のユーラシア主義者」と呼ばれる。

2. サヴィツキーによるロシア革命の理解

(1) 西欧化の帰結としての革命

サヴィツキーがリベラルな思想からユーラシア主義へ移行した背景には、革命、内戦、亡命の中で、自国ロシアの本質を改めて問い直そうとする姿勢がある。かれの人生を含め、ロシアを変容させた革命とは何か、それが何を意味するのか明確にすることは運動の出発点でもあった。

「共産主義の乱痴気騒ぎは、まさに200年にわたる『ヨーロッパ化』時代の完遂としてロシアに到来した」⁹⁾と述べるとおり、サヴィツキーはロシア革命を西欧化の帰結と捉えた。ピョートル大帝以降のロシアは、歴史も文化も西欧とは異質な土壤に、ひたすら西欧的發展を植え付けようとして、ロシアが本来たどるべき道とはまったく違う方向に進んでしまった。西欧を崇拜し、幼子のように模倣に努めた結果、西欧の啓蒙主義から生まれた実証主義、ニヒ

リズム、唯物論が、また無神論、マルクス主義が、そして最後にそれらすべての熟しきった果実である共産主義がロシアにもたらされたのである。

西欧と異なるロシア独自の發展を主張する点で、ユーラシア主義はスラブ主義の継承と考えられ、サヴィツキー自身次のように述べる。

「…スラヴ主義の思想家すべてをそういう人たち(先駆者)として認めねばならない。…ユーラシア主義者はその理念全般において、ロシア哲学・歴史思想の強靱な伝統の継承者である。…その伝統とは、スラヴ主義者が活動を開始した19世紀30-40年代にさかのぼる」¹⁰⁾。

サヴィツキーは19世紀ロシアに、ゴーゴリ(Николай Васильевич Гоголь, 1809-52)、ホミャコフ(Алексей Степанович Хомяков, 1804-60)、ドストエフスキー(Федор Михайлович Достоевский, 1821-81)らに代表される、正教に基づいたロシア独自の世界と、ドブロリュエボフ(Николай Алексейвич Добролюбов, 1836-61)、ピーサレフ(Дмитрий Иванович Писарев, 1840-68)、ミハイロフスキー(Николай Константинович Михайловский, 1842-1904)、そしてポリシェヴィキに連なる啓蒙主義・暴露主義の二つ世界を見ている¹¹⁾。前者はスラヴ主義、後者は西欧主義であり、西欧派の安易な西欧追従が革命の基礎を築いたとして批判し、共産主義者を「新西欧派」と呼んだ。

ロシア知識人による啓蒙思想の通俗的な受容に対する厳しい批判において、サヴィツキーは道標派の影響を受けていると考えられる。ロシア・インテリゲンチャーに内在する精神的諸原理および理念の誤りが、悪である専制の打倒、善である人民の救済という単純化された理想を生み、革命を引き起こす原因にもなったことは、すでに1905年の革命後、ストルーヴェやニコライ・ベルジャーエフ(Николай Александрович Бердяев, 1874-1948)ら道標派が指摘している¹²⁾。

「ヨーロッパ文化を望まなかった民衆と…自己の民族性、民衆との絆、民衆のイデオロギーを理解、表現する能力をヨーロッパ化の中で失ってきた支配層の悲劇的な断絶」¹³⁾は深まり、最後には支配層

の自己崩壊を招いた。ロシア革命は、20世紀初めの突発的な政治・社会現象としてではなく、過去2世紀以上にわたりロシアを蚕食してきた西欧化の当然の帰結として受けとめられたのである。

(2) 国家再生の契機としての革命

サヴィツキーは、ロシア革命を西欧化の悲劇的結末と意味づけるだけでなく、それが健全な国家環境への道を開く契機にもなりうると思った。それは、「共産主義者は、基本的な教義(唯物論とマルクス主義)をヨーロッパから借用した。しかし、実践においてはヨーロッパにもアメリカにもない何かを実現させた」¹⁴⁾からである。西欧の借り物の思想でボリシェヴィキが引き起こした革命は、結果的には当事者の意向と関係なくロシアを西欧から切り離し、まったく異質な世界を構築した。かつて、西欧とロシアの距離はロシアの「後進性」によって説明されたが、いまや西欧の枠組みを離れて異なる位相で発展するロシアを西欧と同じ基準で比較することはできない。この点でロシア革命は、200年におよぶ「西欧のくびき」からロシアを解放したのである。

「ロシア革命は民族の破綻であり、世界の恥辱である」¹⁵⁾と規定し、深い絶望と悲嘆に満ちていた道標派とは対照的に、ユーラシア主義者は革命に肯定的側面を認めることができた。サヴィツキーの目には、革命が未曾有の道徳的、政治的破滅をもたらし、ドストエフスキーの『悪霊』の世界がロシア全土を被っているとは映らなかつた。道標派より一代若く、多くが20代で革命を経験したユーラシア主義者には、革命をより現実的に受け止められる柔軟性があつたと思われる。

共産主義を否定しながらも現状認識からロシアの再生を目指したサヴィツキーは、ナショナル・ボリシェヴィズムを提唱した道標転換派に一定の賛同を示した数少ない亡命ロシア人の一人である。ニコライ・ウストリャロフ(Николай Васильевич Устрялов, 1890-1938)を中心とする道標転換派は、ユーラシア主義者と同年の1921年にプラハで論集を発表し、現時点でロシアの国力を回復できるのはボリシェヴィキのみとして、ソ連政権への協力を呼びかけた¹⁶⁾。ウストリャロフを擁護するサヴィツキーは、

ストルーヴェ宛ての手紙に次のように書いている。

「…わたしは、共産主義のみならず、あらゆる社会主義を常に否定してきたし、今もきっぱりと否定します…それでもなお、わたしは、将来のロシアを将来のソビエト政権に結び付けて考えています」¹⁷⁾。

手紙が書かれた1921年半ばに、ボリシェヴィキに對抗できる国内勢力は考えられず、また、この年に始まったネップ(新経済政策)への政策転換は、ロシアが共産主義とは別の道を進むという期待も与えていた。革命を支配層の交代と捉え、西欧から解放された新しい支配層が、正しいイデオロギーに基づいた国家主義的統治を意味するイデオクラツィヤ(идеократия)を目指すべきと考えていたサヴィツキーは、ボリシェヴィズムを共産主義とは区別して捉え、新たな国家建設の手段になり得るとみなした。

「弁証法は、ユーラシア主義者の好む言葉である」¹⁸⁾と述べるとおり、サヴィツキーは、歴史の弁証法による発展の可能性を信じていた。正教の倫理に基づく過去のロシアと西欧化の帰結としての革命を経たロシアが、その対立を克服して新たな世界を生み出す。サヴィツキーが目指したのは、「革命と伝統の和解」であり、専制でも共産主義でもない「第三の途」であった。

3. ロシア=ユーラシアの誕生

(1) ロシアにおける東方の要素

西欧文明の絶対性に異議を呈したユーラシア主義は、ロシア史もまた西欧の価値基準で規定されると指摘し、その見直しを迫った。13-15世紀の約250年にわたるモンゴル・タタールによるロシア支配の再評価は、とりわけ大胆に行われた。ロシアをヨーロッパから隔絶し、野蛮と残虐で荒廃させた屈辱の時代として、「タタールのくびき」と呼ばれてきたモンゴル統治についてサヴィツキーは、「〈タタールのくびき〉がなければ、ロシアは存在しなかつたであろう」、「…ほかならぬタタールの手に落ちたことは、ルーシにとっての大きな幸いであつた」¹⁹⁾と述べ、従来の欽定歴史家の評価に真っ向から反論した。

宗教に寛大だったモンゴル帝国は、ロシアの精神文化を本質的に変えることなく効率的な軍事組織や強力な中央集権制度をロシア人に教えた。ヨーロッパやトルコに征服されていたならば、カトリックやイスラムへの改宗を強いられたやもしれぬロシアは、パクス・モンゴリカのもとでロシア正教を温存しつつ、モスクワ公国の基礎固めができた。サヴィツキーは、モスクワ公国がモンゴル帝国の継承国であると考え、モンゴルの遺産を肯定的に捉えたのである。

「ロシアの土地は、モンゴル帝国という世界帝国のシステムに入った」、「ルーシに、東方への道が開かれた」²⁰⁾として、G.ヴェルナツキーも、農耕・海洋文化と遊牧・大陸文化の融合圏としてのモンゴル帝国におけるロシアの発展を強調した。

サヴィツキーは、東方のステップに住むチュルク人やモンゴル人が、森林地帯に定住していたロシア人に、内的ダイナミズムを与えたことを強調する。ロシア人は、ステップを自由に移動する遊牧民との接触により、本来の農耕民族とともに騎馬民族の要素も合わせもつようになったのである。

ロシアと東方の有機的結びつきについては、「ロシア人国家を一つの構成要素とするステップ政治経済圏」に触れて、イスラム地域文化の専門家も次のように指摘している。

「むしろ多民族国家として成長する以前のロシアには、想像以上に東方のモンゴル＝トルコ系の伝統が強かった。このことはしばしば意図的に無視されるか、過小評価されがちである」²¹⁾。

ロシアと東方の歴史的相互関係に注目したユーラシア主義は、ヨーロッパを中心とした歴史観を見直す契機となるとともに、ステップ遊牧民に対する関心を刺激し、その後の遊牧民族や少数民族の研究の促進に一定の役割を果たしたことが認められている。²²⁾

ロシアの本質として、歴史的、有機的に組み込まれた東方の要素を重視したことで、ユーラシア主義はスラヴ主義の枠を超えていく。サヴィツキーは、ユーラシア主義が、「スラヴ主義の思考体系に入ることのなかった、まったく新しい文化=歴史的、社

会的要素の発生と発現によって規定される」として次のように述べる。

「スラヴ主義は、ある意味では、地方的かつ〈家庭的〉潮流であった。今日、ロシアの前には、多大なる歴史的意義をもつ、新たなヨーロッパ＝アジア(ユーラシア)文化の中心となる現実的な可能性が開けており、一貫した創造的保守の世界観(ユーラシア主義は自らをこのように考える)の企図と実現のためには、然るべき、今までにはなかったモデルと尺度を探し出さねばならない」²³⁾。

こうして、ユーラシア主義の基軸はスラヴ地域を離れ、東方へと移動し、ユーラシア全体を俯瞰しつつロシアの発展を模索するようになってゆく。

(2) 南・東・西の融合としてのロシア

ユーラシア主義がロシアにおけるチュルク系民族の要素やモンゴル支配の影響を強調することは、西欧の否定やその反動としてのアジアへの逃避を意味するわけではない。サヴィツキーが主張するのは、あくまで「ヨーロッパでもなく、アジアでもない」、多様な文化を複合的に吸収して形成されたユーラシア文化圏である。「ロシアの文化的存在には、互いに対比できるような割合で様々な文化の要素が入った。南、東、西の影響は、交互に入れ替わりながら一貫してロシアの文化世界における主要な地位を占めてきた」²⁴⁾とされる。

まず南は、キエフ・ルーシに東方キリスト教を伝播し、10-13世紀に関わりの深かったビザンチンを意味する。ヘレニズムの西方と古代東方の要素を融合して成立したビザンチンは、ロシアの精神的伝統の基盤をなした文化とされる。東は、モスクワ公国に中央集権的国家基盤を与えた13-15世紀のタタール・モンゴルのステップ世界である。そして西は、18世紀に始まるロシアの近代化以降に絶大な影響力を持ち続けた西欧である。ロシアの歴史は、南(ビザンチン)、東(アジアのステップ)、西(西欧)の三つの要素を融合しつつ特殊なユーラシア文化圏を形成した。ここから、「ロシア＝ユーラシア」という概念が誕生する。

ロシア＝ユーラシアは「発展する独特の文化的人

格」であり、「人類の幾多の文化における指導的で、もっとも重要な役割を担っている」²⁵⁾とされる。ここで言う「人格(личность)」とは、個別化された人格ではなく、「多様性のいきいきとした統一」としての「シンフォニックな人格(симфоническая личность)」あるいは「共同体的人格(соборная личность)」である。シンフォニックな人格とは、「水が魚を包含するように、内部に個々の人格を包含する空間や環境ではなく、個々の人格の統一そのもの」²⁶⁾と説明される。階級、国家、民族、文化も人格である。そして、各社会グループが国家に、諸民族が人類に包摂されるように、シンフォニックな人格もまた、より上位の人格に有機的に統一され、不完全であるがゆえに内部の葛藤を超克しつつ発展してゆく。

シンフォニックな人格としてのロシア＝ユーラシア文化は、一体化した完全な人格である正教により包摂される。「宗教が文化を築き、規定する。そして文化は宗教の一つの発現である」²⁷⁾。サヴィツキーにとっての宗教、つまり正教は、文化を生みだし、イデオロギーの基礎に置かれるべき究極の原理であった。しかし、かれは、政教一致の宗教国家を目指したのでもなければ、異教、異端者に正教への改宗を強要するつもりもなかった。それは、正教、特にロシア正教が、「自己犠牲」や「従順」、「寛容」や「慈悲」という共同体的精神に基づき、あらゆる宗教を受容しうると考えていたからだ。「異教は、潜在的な正教である」とされ、仏教の「思弁性」やイスラム教の「活動性」は、正教の一側面を表しているに過ぎない。異端のカトリックやプロテスタントさえも、いずれは正教が吸収できるとみなされた。「正教は、全世界が自ら正教を奉ずるようになることを望んでいる」²⁸⁾のである。

人格においても正教においても強調されるのは、ホミャコフらが神学思想として述べ、ロシア民族に特有の理念とされる「ソボルノスチ(соборность)」で、これは共同体的な一体性を意味する。このソボルノスチこそがサヴィツキーにとっては、多様な文化や宗教の融合を可能にする要であった。ロシア＝ユーラシアを包摂する正教においては、神学的意味

よりも慈愛に満ちた共同体的精神が強調される。瓦解したロシア帝国の版図に重なって成立したソ連邦は、共産主義と訣別するならば、ロシア＝ユーラシア文化を発展させる基盤になりうるとサヴィツキーは考えていた。

4. 地政学から見るユーラシア

(1) ロシア＝ユーラシアの地政学的統一

ユーラシア主義の命名は地理的名称に由来するものだが、単にヨーロッパとアジアを合わせた大陸を指してユーラシアと呼んでいるのではない。「従来の地理学が〈ヨーロッパ〉と〈アジア〉という二つの大陸として識別してきた旧世界の主要地域に、かれら(ユーラシア主義者)は、〈ユーラシア〉という第三の中間大陸を識別するようになった」。サヴィツキーによりユーラシアの地理的範囲は、はっきりと特定される。それは、ロシア極東、東シベリア、中央アジア、ベルシャ(イラン)、カフカス、小アジアの山脈に囲まれたヨーロッパ東部から東の地域である。ウラル山脈を境にロシアをヨーロッパ部とアジア部に分ける従来の地理区分は退けられ、山脈の両側の地勢や気候の共通性が強調される。ウラル山脈西部からヨーロッパ東部までの地域に特徴的な広大な平野、激しい寒暖の差、厳しい冬、少ない降雨量は、ヨーロッパ西部よりもはるかに西シベリアやトゥルケスタンに近い。また、ツンドラ、森林、ステップ、砂漠と帯状に連なる自然はウラル山脈の両側に同じように続いている。そして、「ロシアは〈ユーラシア〉の土地の主要空間を占めている」²⁹⁾のである。

地政学的見地からは、西欧は旧大陸³⁰⁾の半島に過ぎず、ビザンチン、インド、中国も「沿岸＝周辺国」でしかない。旧大陸の中央部を統合したのはロシアであり、「ロシア史のプロセスは、総合的な発展地(месторазвитие)としてのロシア＝ユーラシアの創設プロセスと規定されうる」³¹⁾。ビザンチンを通して沿岸＝周辺世界と接近し、タタール支配を通じてアジア的なステップを取込んだロシアは、その後も地政学的な発展を続けた。「タタール時代以降もっとも重要な歴史的事実となったのは、ロシア民

族のステップへの拡散、ステップの政治的、民俗的開拓である。このプロセスは、20世紀初頭までに黒海、アゾフ海、またカスピ海と中央アジアの一部の〈ステップ〉空間への入植をもって完了した³²⁾。

ここでサヴィツキーは、19-20世紀のロシアによる中央アジアやカフカスの併合を、ユーラシア統合プロセスの一環として容認している。しかし、中央アジアおよびカフカス諸民族は、ロシアによる異民族統治、植民地支配にもっとも根強い抵抗を示し、ロシア革命からソ連邦成立初期にかけては激しい独立運動を展開したイスラム教徒である。この地域とロシアとの確執がソ連時代を経た今もなお克服されていないことは、チェチェンや旧ソ連中央アジア諸国の紛争が示すとおりである。

しかし、サヴィツキーは、ロシア=ユーラシアの地政学的統一を極めて楽観的に見ていた。13-15世紀がパクス・モンゴリカの時代であったように、19-20世紀のロシアによるカフカス、中央アジアの併合の後に「パクス・ロシア」が成立すると考え、そこに残された矛盾をロシア=ユーラシアの地政学的一体性の中に溶解させてしまったのである。

(2) 大陸国家としてのユーラシア

ロシアで初めて地政学を論じたのはユーラシア主義者たちで、わけてもサヴィツキーはロシア地政学の創始者といえる。

地政学は、2度の世界大戦期にナチス・ドイツや日本の領土拡張を正当化する理論的道具として使われたこともあり、戦後は学問としての生命を失っていた。その後1970年代にアメリカやフランスで見直されるようになり、「空間的、または地理的観点からの国際関係の研究」³³⁾という新たな定義のもとで復権を果たした。しかし、ソ連では「帝国主義的拡張の論拠のために地理的データを用いる政治概念」³⁴⁾として否定され続け、公式の研究分野としては認められなかった。ソ連で公然と地政学が論じられるようになったのは、ペレストロイカ以降である。

地政学の起源は19世紀末で、ドイツのフリードリッヒ・ラッツェル(Friedrich Ratzel, 1844-1904)や

スウェーデンのルドルフ・チェレン(Rudolf Kjellen, 1864-1922)は、国家は空間的有機物であり生存圏(Lebensraum)を求めて成長していくと考えた。この概念はカール・ハウスホーファー(Karl Haushofer, 1869-1946)に引き継がれ、大陸国家の拡張理論としてナチス・ドイツに利用される。米国ではアルフレッド・マハン(Alfred Mahan, 1840-1914)が、世界支配の決定的要因としての海洋勢力(Sea Power)の概念を提示し、これを敷衍したイギリスのハルフォード・マッキンダー(Halford J. Mackinder, 1861-1947)により、20世紀初頭に地政学は確立する。マッキンダーは、世界の歴史を海洋勢力と大陸勢力(Land Power)の衝突として捉えた。つまり、ユーラシア大陸の中核地帯であるハートランド(Heartland)を制覇しようとする大陸国家と、これを阻止しようとする海洋国家の闘争である。内陸アジアの覇権をめぐる1世紀にわたってグレートゲームを闘ったイギリスとロシアは、日露戦争の開戦前夜であった当時も激しく対立していた。大陸国家と海洋国家の対立の構図は、ロシアとイギリスに当てはまるものでもあった。

サヴィツキーの地政学は、ハウスホーファーおよびマッキンダーに連なり、大陸国家としてのロシア=ユーラシア像を明らかにしようとしたものである。サヴィツキーは、欧米の地政学者たちが常に注視していたハートランドそのものの内部から、その利益擁護のために声をあげた初めての地政学者である。

サヴィツキーの地政学的戦略は、すでに1921年にロシアの経済発展を扱った論文「大陸-海洋(ロシアと世界市場)」に明快に論じられている。ロシア=ユーラシアの地政学的特徴は、端的に次のように説明される。

「…その(ロシア=ユーラシアの)地域が海岸からとてつもなく遠く離れているという特徴と、その海(複数)が凍結し、〈閉鎖的である〉(交流の政治的、軍事的遮断の危険を増大する)という特徴の組み合わせによって、ロシア=ユーラシアは、およそ他の世界には類のない状況に置かれている」³⁵⁾。

ユーラシア大陸の奥地がいかに海洋から隔絶され

ているかは、各大陸における内陸から海岸線までの距離の比較で表される。西欧には海岸線から600km以上離れた地点はない。オーストラリアの最深部は海岸線から800-1000km、アフリカ、北米、南米では1600-1700kmである。しかし、アジアには海岸から2400km以上離れた地点があり、そのほとんどはセミレチエ(カザフスタン)に、一部がクリジア(中国新疆ウイグル自治区)にある。また、ロシア内陸部から海岸線へ出ても、そこにある海は、太平洋に面しているカムチャッカを除けば、「すべて閉ざされた、大陸性で、内陸の海であり、そのほとんどが、ときには6ヶ月以上も凍結する海である」³⁶⁾。バルト海、白海、黒海、日本海など、ロシアが接する海は、大洋への出口を軍事的に容易に遮断される内海にすぎない。

海までは遠く、その海も外洋には開かれておらず、しかも凍結するというロシアの環境は、低廉な船舶輸送で沿岸都市を中心に活発な海洋貿易を展開する諸国との競争を不可能にしている。「世界経済の裏庭」にならないためには、ロシア=ユーラシアは内陸貿易を発展させてアウトルキー(自給自足経済)を目指すしかない。

当時、領土拡張や世界制覇の理論付けとして地政学が利用されていたのに対し、サヴィツキーが、不凍港を求める膨張主義に大きな意味はないとして、一国社会主義を先取りしたかたちで大陸国家ロシアの安定を説いている点は、特筆に値しよう。

ソ連全土の大規模な工業化や農業集団化による盤石な社会主義国家の確立を目的として、1929年春に始まった第1次5カ年計画は、サヴィツキーの考えに適う路線と映ったはずだ。

「五カ年計画の肯定的目的は、…ロシア=ユーラシア独特の顔の建設にあると定義できる。…『社会主義建設』という偽名のもとにロシアのアウトルキーが陣取っている。そして、まさにその熱情によって『社会主義建設』の要員たちは生きている。ここには意義深い歴史の罫がある。その罫は、共産主義者たちをしてユーラシアの事業を行わせている」³⁷⁾。

ここでもサヴィツキーは、共産主義を否定しながらもソビエト政権の肯定的側面を認めている。キエ

フ・ルーシに始まり、モスクワ公国、ロシア帝国を経た初期のソ連が、ロシア=ユーラシアの連綿たる地政学的統一を継続していると見たのである。

5. 現代ロシアのユーラシア主義

(1) ユーラシア主義復権の経緯と背景

1980年代末から90年代初めにかけて復権したユーラシア主義は、一種の流行とも呼べる現象にまでなった。学術誌や一般誌にサヴィツキーらの論文が断片的に掲載されはじめ、『エレメントイ：ユーラシア時評』³⁸⁾、『ユーラシア：民族、文化、宗教』³⁹⁾、『ユーラシア通報』⁴⁰⁾などユーラシア研究、ユーラシアの文化、国家、戦略を扱った雑誌の発行が続いた。選集や論集⁴¹⁾の出版やシンポジウム⁴²⁾の開催が相次ぎ、政界でも注目されるようになる。

このような華やかな復権の背景には、三つの理由が考えられる。まず第一は、ペレストロイカ期のグラスノスチ(情報公開)政策の中で、それまでサミズダート(地下出版)としてしか読めなかった著作の刊行が可能になったことである。1980年代後半のソ連では、かつて発禁書であった異論派や亡命知識人の著作がこぞって読まれた。1987年のゴルバチョフによるスターリン批判後は、歴史の空白を埋めようとする動きが活発になり、その多くが弾圧の犠牲になったユーラシア主義者たちの運命も関心を集めた。その後、批判がレーニン、ロシア革命、社会主義そのものにまで波及すると、ロシア革命や共産主義に対しソ連政権とは異なる立場をとったユーラシア主義が、いっそう注目されるようになった。

第二の理由は、ペレストロイカ期から始まった欧米をモデルとする改革の行き詰まりと、それに伴う改革派および民主派に対する失望である。ゴルバチョフ(Михайл Сергеевич Горбачев, 1931-)、エリツィン(Борис Николаевич Ельцин, 1931-)時代は当初、欧米との対立を解消し、価値を共有することによって、ソ連・ロシアも西側世界と同じ自由で豊かな生活を享受できるという楽観主義を国民に与え、国全体が明るい未来を信じるユーフォリア(多幸症)に陥った。「われわれは一足飛びに、一息で、灰色の停滞した全体主義的過去から、明るく豊かで

文明的未来へ飛び越えられると信じた。…わたしは、どこか無邪気すぎた」⁴³⁾とエリツインも辞任演説で認めるとおり、現実の改革はいっこうに進まず、富の偏在、生活水準の低下、犯罪の増加などで社会は混乱した。改革の失敗は、欧米型の市場経済や民主主義が果たしてロシアに適しているかとの疑問をひきおこし、ロシア独自の新たな改革の道が問われるようになった。欧米モデルの改革路線への失望の時期に、西欧追随を否定し、ロシアの特殊性を強調するユーラシア主義が、新鮮に受けとめられたのは当然であった。

第三の理由は、現代ロシアが直面しているアイデンティティー・クライジス(自己同一性の危機)に対し、ユーラシア主義が一定の回答を与えていることにある。突然のソ連邦崩壊により誕生した新生ロシアは、国家と民族それぞれの新しいアイデンティティー確立に苦しんでいる。マルクス・レーニン主義という公定イデオロギーを放棄したうえに、国境の大幅な変更でソ連邦の約4分の1の領土を喪失して生まれたロシアは、新たな求心力となる国家理念を構築し、変容した地政学的状況に則した国家戦略を練り直す必要に迫られている。イデオロギーの基礎としての正教、ロシア＝ユーラシアの概念、ユーラシア国家の地政学などは、現代ロシアの新たなイデオロギーや国家理念になり得る要素をもっている。また、民族を超克した社会主義的人間「ホモ・ソヴィエティクス」であるソ連人の名のもとに押え込まれてきたロシア人の民族意識は、ソ連邦崩壊前後から、ロシア人の民族性や文化の本質(русскость)の探求となって表面化した。「ユーラシア人」の概念もまた、ユーラシア主義者たちがロシアの歴史、文化、民族の本質を探究して行き着いた結論としてのアイデンティティーであった。

ユーラシア主義の復権を促したのは、単なる隠された過去への回帰ではなく、ユーラシア主義の持つ現代性にあるといえるだろう。ロシア帝国の崩壊とソ連邦成立期にユーラシア主義が提起した問題は、ソ連邦崩壊と新生ロシアの誕生を経験した現代ロシアで現実的な意味を持って蘇った。専制が倒れた後に、いかなる理念をもって国家を再生すべきか、ロ

シア人の「ルーツ」をどこにおくかといった1920年代のユーラシア主義者の苦悩と模索は、70年を経た現代ロシアの知識人に共通するものである。

(2) 現代ロシアにおけるユーラシア主義の評価

現代ロシアが抱える焦眉の問題と絡んで復権を遂げたユーラシア主義に対する評価は、複雑である。ロシア革命の意義、ロシアと西欧の関係、ロシア文化へのチュルク系諸民族の影響、ユーラシア国家としてのロシアの発展などユーラシア主義が問いかけた様々な問題をめぐっては、復権と並行して数多くの論争が起こった。ユーラシア主義全般についても、「思想や哲学といった学問ではなく、思弁的な体操に過ぎない」⁴⁴⁾として、一過性の流行とみなす民族学者から、ユーラシア主義がもつ反西欧と非西欧という二つの要素の后者に意義を認め、ポスト社会主義のロシアにおける重要な思潮として注目している哲学者⁴⁵⁾まで、その評価は時に対極的である。

このように、相矛盾するような評価が出てくる理由は、第一に、ユーラシア主義が思想としても政治運動としても完成されたものではない点にある。1920年から十数年の短い歴史の中で分裂を経たユーラシア主義の運動には、多くの知識人が加わっており、その思想や目的は一樣ではなかった。ソビエト政権に最後まで反対した者、支持に回り政権に取り込まれた者、正教の重要性を強調する者、ロシアのアジア的要素を重視する者など様々で、ユーラシア主義者を完全に特定することすら難しい。また、ユーラシア主義の主張のどこに焦点を当てるかで、ニュアンスは変わる。たとえば、ソルジェニーツィン(Александр Исаевич Солженицын, 1936-)はユーラシア主義を「ロシアは有機的にアジアに属し、その将来はアジアとの親和および統合のもとで築くべきとする理論」⁴⁶⁾と定義し、センドロフ(Валерий Анатольевич Сендеров, 1945-)は「西欧憎悪主義」⁴⁷⁾と呼ぶが、これらはユーラシア主義の一面を誇張しているだけであり、サヴィツキーには当てはまらない。次に、ユーラシア主義の著作の刊行が、まだ十全ではない点もあげられる。サヴィツキーの論集が初めてロシアで出版されたのは1997年であ

り、それもすべての著作を収めているわけではない。哲学事典にユーラシア主義の項目が掲載されるようになったのも1995年以降のことである⁴⁸⁾。

第三に、ユーラシア主義が、ネオ・ユーラシア主義と混同して捉えられていることも指摘されるべきであろう。ロシアにおけるユーラシア主義の復権は、その現代的な文脈での「読み直し」と平行して進んだ。このため、現代的な、特に政治的な「読み直し」を経た、ネオ・ユーラシア主義が、本来のユーラシア主義と同一視されることもある。偏狭なロシア・ナショナリズムの一形態との評価は、このような混乱から生じたものと考えられる。

(2) ネオ・ユーラシア主義の潮流

現代ロシアの文脈によるユーラシア主義の読み直しは、アレクサンドル・ドゥギン(Александр Гельевич Дугин, 1964-)が1988年から89年にかけてソヴェツカヤ・ロシア紙に発表した論文に始まる。ロシア人の民族的本質に関心をもち、その精神性の回復とロシア国家の再生を志向していたドゥギンは、ユーラシア主義の現代性に目をつけた。帝政でもなく、共産主義でもない「第三の途」が、共産主義でもなく、資本主義でもない現代ロシアの「第三の途」に通じ、伝統主義と現代主義の宥和の可能性を示唆していると捉えたのである。「私がユーラシア主義に関心を寄せたのは思想全般に惹かれたからではなく、『第三の途』の概念が私の思想や運動に適していたからだ」と述べるドゥギンは、自らをネオ・ユーラシア主義者と考える⁴⁹⁾。

ユーラシア主義を独自に解釈してネオ・ユーラシア主義を派生させているのは、ドゥギンだけではない。ソ連の再統合、ユーラシア経済圏の復活、アジアとの協調、NATO(北大西洋条約機構)との対決、米国一極主義への抵抗など、ネオ・ユーラシア主義の潮流は多様であり、ユーラシア主義の復権とは、「各自がそこに(ユーラシア主義に)自分の探しものを見つける」⁵⁰⁾ことで成立しているともいえる。そして、「問題は、20年代ユーラシア主義の何か古生物学的な分析や解明にあるのではなく、予見としてのユーラシア主義が何を意味するのかを理解する

ことにある」⁵¹⁾との発言が示すとおり、ユーラシア主義の現代的意義を重視する傾向は研究者の間でも強くなっていった。

ユーラシア主義の様々な解釈は、1990年代後半になると次第に、緩やかではあるが一つの色調を帯びてくる。ユーラシア主義特有の文明論や歴史観は薄れ、ポスト社会主義の政治理念、外交理念として生まれ変わった観がある。その推移は、次のように説明される。「1980年代末からソ連ではユーラシア主義のイデオロギーの復活が見られ、当時は保守派も民主派も同程度にこれを借用していた。最近のネオ・ユーラシア主義とその理念は、様々な種類のエスニック・ナショナリズムの代表者によって広く用いられている」⁵²⁾。また、「ネオ」を付けない「ユーラシア主義」という言葉が、政界の愛国主義および反米主義と結びついた外交理念としても使われるようになる。

日本ではむしろ、欧米との協調を重視し、その支援によりロシアの経済改革を目指す大西洋主義(北大西洋主義とも呼ばれる)の対立概念としての「ユーラシア主義」の方が紹介されており、「地政学的に近隣の、主として非西欧諸国との関係を進める考え」⁵³⁾と定義されることもある。大西洋かユーラシアかという極めて雑駁な区分が示すとおり、現代ロシアの外交理念としてのユーラシア主義は、「大西洋主義に対する漠然とした反撥の総称」⁵⁴⁾というべきものであろう。また、ロシアの特殊性を強調する見方、欧米的な改革路線への批判的視点と結びつけてユーラシア主義が論じられる場合もある。

曖昧な点を残す現代ロシアの(ネオ)ユーラシア主義ではあるが、そのいくつかの傾向は次のようにまとめられる。

1. ソ連邦再統合の原理：「ユーラシア主義とは、ポスト・ソビエト空間の一体性回復の期待と結びついた、ある種のテキストの偽名である」⁵⁵⁾と言われるとおり、ソ連邦解体を不満とする人々による、再統合の可能性の模索とも呼べる潮流である。ナザルバエフ・カザフスタン大統領(Нурсултан Абншевич Назарбаев, 1940-)が提唱する「ユーラシア同盟」のように、旧ソ連経済圏の回復を重視す

るものから、広義では、ウラジーミル・ジリノフスキー(Владимир Вольфович Жириновский, 1946-)が主張する「南進」によってアフガン、イラン、トルコまでロシアの傘下に入れる⁵⁶⁾というものまで様々である。

2. 東方との協力：日本との関係改善に意欲を見せたエリツイン政権の一部をはじめ、アジア諸国との関係を重視する動き。APEC(アジア太平洋経済協力会議)加入による経済協立志向、中国、インド、イランなどとの軍事関係の強化を目指す動きなどがある。

3. NATO拡大および米国一極支配への反撥：ワルシャワ条約機構が解体した一方で、1997年にポーランド、ハンガリー、チェコがNATOに加盟したことは、ロシアに危機感と欧米不信を引き起こした。大西洋主義に対抗する意味でのユーラシア主義は、軍事面、経済面ともに国際社会への影響力を強めている米国への反撥へと収斂する傾向にある。「合衆国を長とし、NATOを世界の憲兵とする、一極構造世界の西側モデルが実現すれば、…ロシアには半植民地というありがたくない役割が振られてくる」⁵⁷⁾とするゲンナジー・ジュガーノフ・ロシア共産党党首は、ロシアを盟主とするユーラシア圏を形成して米国に対抗しようとする志向する。米国一極支配への抵抗を標榜するのは、ロシア共産党や愛国主義勢力だけではない。イスラム原理主義者のゲイダル・ジェマリ(Гейдар Джамалович Джемаль, 1947-)も「西側、大西洋主義との闘いにおいては、イスラム世界もロシアも、バリケードの同じ側にいるべきだ」⁵⁸⁾と考えている。

もっとも広範な反米勢力の結集を目指すのはドゥギンで、次のように述べる。

「ネオ・ユーラシア主義は、大西洋主義およびその価値観である市場、自由民主主義、非宗教文化、個人主義哲学などの文明システムによる世界支配を否定する、地球規模の戦略の完全な扇を構築する要となりうる、唯一の理論的綱領である」⁵⁹⁾。

ドゥギンによるとソ連再統合はミニマム・プログラムに過ぎず、最終目的は、世界を米国支配から解放することにあるという。そして、ロシア国内では、

自由主義、市場経済派のヤブロコや右派勢力連合(СПС)、排外主義のジリノフスキー(ロシア自由民主党)、極左マルクス主義のアンピーロフ勤労ロシア議長(Виктор Иванович Анпиров, 1946-)らを除くあらゆる政党や団体との共闘が可能と考えている⁶⁰⁾。

こうして、政治化し、反米気運に含まれたネオ・ユーラシア主義が、「ユーラシア主義」の名のもとに広がっていく様相を見せている。

むすび

20世紀ロシアにおける二度の体制転換は、どちらもロシア社会を根本的に変容させただけでなく、世界秩序を揺るがすほどに劇的なものだった。社会変動と新体制確立の過程では、当然、国からはじき出される人々が出る。ユーラシア主義者たちも、そうしてはじき出されたロシア知識人であった。70年にわたり歴史の闇の中に眠っていたかれらは、20世紀ロシアの二度目の体制転換にあたり、祖国に華やかに復権を果たした。ソビエト連邦という「幻想の共同体」が崩壊した後に、ロシアが過去のディアスポラを呼び戻したかのようである。過去にとらわれずに新しい時代を読みとり、適切な針路を与えてくれる理念を、現代ロシアが必要としている。

サヴィツキーら若い亡命知識人は、ソ連政権に完全に背を向けた一代うへの亡命者たちとは異なり、革命、内戦からソ連邦成立期にかけてのロシアを現実として受けとめ、その理解に努め、新たな発展を望んだ。かれらは19世紀半ばからロシアの言論界を二分した西欧主義かスラヴ主義かの二元論にとられることもなければ、マルクス主義の洗礼も受けず、西欧の自由主義にも全面的に傾倒することなく、自由な意識で激動の時代に臨んだ知識人だった。過去の桎梏から解き放されて未来を志向したことで、ユーラシア主義はまさに「19世紀ロシアの知的、精神的伝統に鋭い挑戦の刃を突きつけ、その克服を模索した新世代知識人の苦闘の表現」⁶¹⁾であった。

「苦闘の表現」のためにサヴィツキーは、高い代価を支払わねばならなかったが、かれの思想はロシ

アの本質を考える重要な鍵を残している。歴史、文化、宗教、民族性、地理的特質等の見直しは、ロシアがヨーロッパでもアジアでもないユーラシアであるとの認識に至る。これまでロシアと呼んできたものは、ビザンチン、モンゴル、ヨーロッパの要素を融合して形成されたロシア=ユーラシアにほかならない。ロシア=ユーラシアは、森林とステップ、農耕と遊牧、内陸と沿岸、正教とイスラムなど正反対の要素を融合しつつ発展し、地政学的統一を達成したのである。

ロシア=ユーラシアとは、ロシアを的確に言い直した名称と言うべきであろう。ロシア帝国、ソ連邦の版図に重なるその領域は、最終的にはロシア正教特有の共同体的原理で包摂され、シンフォニックな人格として発展を続けるとみなされた。ここに、ユーラシア主義者の理想主義と楽観主義がある。サヴィツキーが、「ユーラシア主義は理念の運動である」⁶²⁾と述べるとおり、それは政治運動と呼ぶには、あまりに思弁的であり、思想体系として確立するには、あまりに現実に近すぎたといえる。そのため、分裂期に政治化を強めたユーラシア主義者たちは、容易にソ連政権に取り込まれ、また、現代ロシアでの復権後も様々な政治的解釈を受けている。

ソ連時代には、西欧主義とスラヴ主義は、すべてに優越する公定イデオロギーであるマルクス・レーニン主義のもとで影を潜めていた。しかし、共産主義のイデオロギーを放棄した現代ロシアで、西欧主義とスラヴ主義の論争は、欧米をモデルとする政治・経済改革か、あるいはロシア独自の発展かに装いを変えて、再燃したと見ることができる。ペレストロイカが始まってから15年の年月は、ロシアにとっては、漠然と夢見た西側の自由で豊かな生活への憧憬が崩れていくプロセスでもあった。マルクス・レーニン主義という国家理念は放棄したが、そのあとを埋めるべき新たな国家理念は、いまだ形成されずにいる。政治、社会の大きな変動に意識が追いつかず、アイデンティティー・クライジスに陥ったロシアでユーラシア主義に光が当てられたのは、決して偶然ではない。

西欧型資本主義は受入れがたいが、共産主義への

逆行はもはや不可能であり、第三の途が必要とされる。現在を超克する第三の途の模索こそ、ユーラシア主義の課題であった。ユーラシア主義は、ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831)の弁証法の影響を受けているとする見方がある。宗教と倫理を至高とする世界(正)から対極の無神論、共産主義世界(反)への移行が起こった中で、その対立の克服を目指したのがユーラシア主義(合)であった⁶³⁾。それならば、現代ロシアにおいてもまた、硬直した社会主義(正)から欧米の自由主義、資本主義(反)へと歴史の振り子が大きく揺れる中で、その矛盾の克服(合)が模索されているのではなかろうか。ここにユーラシア主義の現代性があり、復権と読み直しは自然の流れであろう。

現代ロシアのユーラシア主義の流行は、すでに去ったと見る者もいる。学問や哲学ではなく一過性の流行に過ぎなかったため⁶⁴⁾、ソ連邦解体が確実に定着し、再統合原理は意味を失ったため⁶⁵⁾と理由は様々である。確かに「流行」としてのユーラシア主義は、1990年代末から下火になっている。しかし、これによってユーラシア主義の皮相な理解や政治的道具としての利用は弱まり、むしろ歓迎されるべき傾向であろう。

今後は、その生涯にも著作にもまだ空白の多いサヴィツキーはじめ、ユーラシア主義者たちの本来の研究が進むことが期待される。また、それと平行して、現代ロシアの新たな国家理念としてのネオ・ユーラシア主義の動向にも注目すべきであろう。

註

- 1) ソビエト大百科事典全30巻(第3版、1970年)および哲学百科事典全5巻(ソ連邦科学アカデミー哲学研究所編、1960年)にユーラシア主義の項目はない。ソビエト百科辞典(1983年)の改訂版として発行された大百科辞典(1997年)には、ユーラシア主義の項目が加えられ、発生から分裂を経て消滅するまでの運動の経緯が簡潔に記載されている。
- 2) 約20名の主要なユーラシア主義者を含め、多数の執筆者による7冊の論集が、題名も発行地も変えながら11年にわたって出版された。第1集『東方への脱出』(ソフィア、1921年)、第2集『行路にて』(ベルリン、1922

- 年)、第3-5集『ユーラシア報』(ベルリン、1923、1925年、パリ、1927年)、第6集『ユーラシア選集』(プラハ、1929年)、第7集『30年代』(パリ、1931年)。
- 3) Н. С. Трубецкой, «Европа и человечество», *Наследие Чингисхана*, М., 1999, с.72, 81, 90.
- 4) П. Савицкий, «Европа и Евразия (По поводу брошюры кн. Н. С. Трубецкого «Европа и Человечество»)», *Континент Евразия*, М., 1997, с.155.
- 5) Г. В. Флоровский, «Евразийский соблазн», *Мир России-Евразия: Антология*, М., 1995, с.354.
- 6) Н. С. Трубецкой, «Письмо в редакцию», *Мир России*, с.301.
- 7) サヴィツキーが1924年にモスクワ郊外で開かれた第1回ユーラシア主義者大会に出席するため合法的にソ連に入国したこと、その後も内密に訪ソしていることは、ソ連邦閣僚会議古文書総局の資料で明らかになっている。Ф. Ашин, В. Алпатов, «Евразийство в зеркале ОГПУ-НКВД-КГБ», *Вестник Евразии*, №2(3), М., 1996, с.15.
- 8) 約100人が裁判にかけられ、後に「ロシア民族党事件」と呼ばれる1933-34年の弾圧では、トルベツコイが海外でロシア・ファシズム運動をしているという事実と反する理由により、かれの兄弟、娘婿、その父などが犠牲になった。
- 9) П. Савицкий, «Евразийство», *Континент*, с.89.
- 10) Там же, с.83-84.
- 11) П. Савицкий, «Два мира», *Континент*, с.113-114.
- 12) 道標派のセミヨン・フランク(Семен Людвигович Франк, 1877-1950)の論文「宗教と科学」(1925年、ベルリン)は、ユーラシア主義論集『30年代』巻末の「ユーラシア主義文献目録1921-1931 ユーラシア主義文献の手引き」に掲載されている。ベルジャーエフ自身は、「ユーラシア主義の中に対抗すべき有害で毒性の要素もある」として、反西欧、正教の歪曲、東方への傾倒等を批判している。Н. А. Бердяев, «Евразийцы» (1925), *Евразия: Исторические взгляды русских эмигрантов*, М., 1992, с.28.
- 13) П. Савицкий, «Евразийство (опыт систематического изложения)», *Континент*, с.89. この論文は、ユーラシア主義者の共同執筆として発表されたが、そのほとんどがサヴィツキーの筆によるとされ、かれの論集に収められている。
- 14) П. Савицкий, «Евразийство как исторический замысел», *Континент*, с.100.
- 15) Петр Струве, «Исторический смысл русской революции и национальные задачи», *Из глубины: Сборник статей о русской Революции*, М., СП., 1990, с.235.
- 16) 一時期は白軍に身を置いたウストリャロフは、ロシアの国家的利益のためには西欧と連合するよりも、進化しつつあるポリシェヴィキに協力すべきとしてソ連政権支持に回った。ソヴィエト体制下のナショナル・ポリシェヴィズムについては、廣岡正久『ロシア・ナショナリズムの政治文化』(創文社、2000年)第4章「ロシア革命と国家—『ナショナル・ポリシェヴィズム』の系譜—」に詳細に論じられている。
- 17) П. Савицкий, «Еще о национал-большевизме» (Письмо П. Струве), *Континент*, с.272.
- 18) П. Савицкий, «Евразийство как исторический замысел», *Континент*, с.98.
- 19) П. Савицкий, «Степь и оседлость», *Континент*, с.332, 333. 本論文については、拙稿(翻訳と解説)「ステップと定住」および「『ステップと定住』におけるサヴィツキーのユーラシア主義—スラヴからユーラシアへの移行—」(岩手県立大学言語文化教育研究センター『言語と文化』第2号、2000年)参照。
- 20) Г. В. Вернадский, «Монгольское иго в русской истории», *Русский узел евразийства*, М., 1997, с.255, 257.
- 21) 山内昌之『ラディカル・ヒストリー』、中公新書、1991年、21頁。
- 22) Л. Е. Горизонтов, «Евразийство 1921-1931 гг.: Взгляд изнутри», *Славяноведение (отдельный выпуск)*, №4, 1992, М., с.8.
- 23) П. Савицкий, «Евразийство», *Континент*, с.97.
- 24) Там же, с.82.
- 25) П. Савицкий, «Евразийство (опыт систематического изложения)», *Континент*, с.43.
- 26) Там же, с.21-22.
- 27) Там же, с.36.
- 28) Там же, с.28-29.
- 29) П. Савицкий, «Евразийство», *Континент*, с.81, 82.
- 30) 新世界アメリカに対して、ヨーロッパ、アジア、ア

- フリカを指す。
- 31) П. Савицкий, «Геополитические заметки по русской истории», *Континент*, с.307. 発展地 (месторазвитие)とは、社会・歴史的環境を含めた地政学的空間を意味する。
- 32) П. Савицкий, «Степь и оседлость», *Континент*, с.335.
- 33) Geoffrey Parker, *Geopolitics. Past, present and future*, PINTER, 1998, p.5.
- 34) ソビエト百科辞典(1983年)の「地政学」の項目。その改訂版である大百科辞典(1997年)では、「外交政策を主とする国家政策が、地理的要因によって決定されるとする政治学の概念」と修正されている。
- 35) П. Савицкий, «Континент-Океан (Россия и мировой рынок)», *Континент*, с.406.
- 36) Там же, с.404.
- 37) П. Савицкий, «Пятилетний план и хозяйственное развитие страны», *Новый град*, 1932, No.5, с.48-49. (А. А. Кара-Мурза, Л. В. Поляков, *Русские о большевизме*, Санкт-Петербург, 1999, с.96より引用)
- 38) «Элементы. Евразийское обозрение» 編集長のアレクサンドル・ドゥギン他、ヴィクトル・アルクスニス、アレクサンドル・プロハノフなど右翼イデオログや政治家を編集委員として1992-98年に9号まで発行された。サヴィツキーの地政学に関する論文が紹介され、北大西洋主義に対抗する地政学論などが展開された。
- 39) «Евразия. Народы, культуры, религии» 1993年の創刊後、財政難で一時休刊したが、カザフスタンのユーラシア統一支持派の資金援助により再刊した。ナザルバエフ・カザフスタン大統領の「ユーラシア同盟」の構想が紹介されているほか、20-30年代のユーラシア主義者の論文も掲載されている。
- 40) «Вестник Евразии» ロシア科学アカデミー哲学研究所のA.S. パナーリンを編集長として1995年に創刊された学術誌。毎号にユーラシア主義に関する学術論文が掲載される。
- 41) 主な選集：Институт всеобщей истории РАН, *Евразия. Исторические взгляды русских эмигрантов*, Москва, 1992, Л. И. Новикова, И. Н. Сиземская (сост.), *Мир России-Евразия. Антология*, Москва, 1995, С. Ключников (сост.), *Русский узел евразийства. Восток в русской мысли. Сборник трудов евразийцев*, Москва, 1997. 1997年にサヴィツキー、1999年にはトルベツコイの論集が出版された。拙稿(書評)「ピョートル・サヴィツキー『ユーラシア大陸』」(岩手県立大学総合政策学会『総合政策』第1巻第4号1999年12月)参照。
- 42) 1994年にロシア科学アカデミー哲学研究所の研究者を中心とする円卓会議が開催され、その資料が翌年の『哲学の諸問題』に掲載された。《Евразийство: за и против, вчера и сегодня (материалы "круглого стола")》, *Вопросы философии*, 6, 1995. 1991年1月にノボシビルスク大学で開かれた全ロシア学術会議の第1部会では、「ユーラシア主義の思想と伝統」がテーマとなった。
- 43) 1999年12月31日エリツィン・ロシア大統領辞任演説より。
- 44) セルゲイ・チェシコ・ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所副所長(Сергей Викторвич Чешко, 1954-)、2000年5月4日モスクワ、同研究所での筆者による聞き取り。
- 45) アレクセイ・カラムルザ(Алексей Алексеевич Кара-мурза, 1956-)ロシア改革理論研究センター所長、ロシア科学アカデミー哲学研究所研究員、1998年11月10日モスクワ、同研究所での筆者による聞き取り。
- 46) А. Солженцын, *Россия в обвале*, М., 1998, с.44.
- 47) *Вопросы философии*, с.29.
- 48) *Философы России. XIX-XX столетия*, Москва, 1995. サヴィツキーの項目には、経歴や著作が詳細に紹介されている。*Новейший философский словарь*, Минск, 1999. ユーラシア主義の項目で、1920-30年の潮流が紹介されているほか、世界のアメリカ化に対抗する理念としての現代的な意味も説明されている。
- 49) 2000年5月6日モスクワ、アルクトゲヤ出版販売所での筆者による聞き取り。ドゥギンは、「ネオ・ユーラシア主義」も「ユーラシア主義」と呼ぶことの方が多く、両者の言葉の区別は特にしていないという。かれは、ソ連時代に大学を退学処分になった右翼の異論派で、1980年代後半からは民族主義、反ユダヤ主義団体「パーミヤチ」の中心的存在だった。2000年現在は、セレズニョフ国家院(連邦議会下院)議長の顧問を務める。注(38)参照。
- 50) *Вопросы философии*, с.26. (L.I. ノヴィコワ発

- 言)。
- 51) *Вопросы Философии*, с.19. (A.S. パナーリン発言)。
- 52) В. А. Шнирельман, «Евразийская идея и теория культуры», *Этнографическое обозрение*, 4, 1996, с.3.
- 53) 下斗米伸夫『ロシア現代政治』、東京大学出版会、1997年、222頁。サヴィツキーらのユーラシア主義を扱った日本の研究論文としては、以下が挙げられる。安岡治子「現代ナショナル派—ロシア21世紀への模索」(聖心女子大学キリスト教文化研究所編『東欧・ロシア—文明の回廊』、春秋社、1994年)。廣岡正久、前掲書および「現代ロシアと『ユーラシア主義』」(皆川修吾編『移行期のロシア政治』、溪水社、1999年)。
- 54) 伊東孝之、林忠行編『ポスト冷戦時代のロシア外交』、有信堂、1999年、48頁。
- 55) *Вопросы Философии*, с.11. (A.S. パナーリン発言)。
- 56) ウラジミール・ジリノフスキー『ロシアからの警告』、光文社、1994年、83頁。
- 57) Геннадий Зюганов, *Географии победы. Основы российской геополитики*, Москва, 1997, с.76.
- 58) *Сегодня*, 8 сентября, 1999 г.
- 59) Александр Дугин, *Основы геополитики*, Москва, 1999, с.162.
- 60) 2000年5月6日モスクワ、アルクトゲヤ出版販売所での筆者による聞き取り。
- 61) 廣岡、前掲書、56頁。
- 62) П. Савицкий, «Евразийская концепция русской истории», *Континент*, с.123.
- 63) Сергей Ключников, «Восточная ориентация русской культуры», *Русский узел*, с.33.
- 64) Сергей Чешко, 2000年5月4日モスクワ、筆者による聞き取り。
- 65) Виктор Алкснис, 2000年5月2日モスクワ、筆者による聞き取り。
(2000年10月3日受理)

The ideas of Pyotr Savitsky and their current meaning —The renaissance of Eurasianism in modern Russia—

Yukiko Kuroiwa

Abstract: The ideological movement known as Eurasianism continued in the 1920-30s among Russian intelligentsia who had immigrated to Europe after the Russian Revolution. Because Eurasianists severely criticized communism and advocated creating a new Eurasian State based on Russian Orthodoxy, the publishing of their works was forbidden during the Soviet era. In connection with drastic changes in Russia, however, Eurasianism enjoyed a resurgence in the early 1990s and began to draw attention from the Russian intelligentsia and politicians. This article seeks to clarify the ideas of Pyotr Savitsky, a distinguished leader of the Eurasian movement, from historical, cultural, and geopolitical points of view. The article also tries to analyze the reasons for the renaissance of Eurasianism in modern Russia and trends displayed in Neo-eurasianism.

Key Words: Pyotr Savitsky, Eurasianism, Russia-Eurasia, Neo-eurasianism